



# 小鹿田焼の里 復興の兆し

## 大雨被害から3ヵ月

# 唐臼39基全て復旧

## 窯元「多くの支援に感謝」

県内を襲った7月の大雨から3ヵ月がたち、大きな被害が出た日田市源栄町の「小鹿田焼の里」にぎわいが戻りつつある。川の水力で動く唐臼は被災した39基が全て復旧。里につながる道路は一部で通行止めが続くものの、散策を楽しむ観光客の姿が見られるようになった。窯元は「多くの人に支援してもらった。日常に戻ったことに感謝している」と再び作陶に打ち込んでいる。

無形文化財。約300年の歴史があり、現在は窯元9軒が伝統の技法を守り続け、課によると、稼働していた



↑制作中の陶器を天日干しする黒木昌伸さん(下)小鹿田焼の里を散策する観光客。日田市源栄町



唐臼全てが大雨で被災。破損や土砂の流入で使えなくなった。ボランティアらが唐臼小屋や水路に積もった土砂をかき出し、9月下旬までに作陶できる環境が整った。小鹿田焼協同組合の坂本工理事長(59)は「皆さんの協力で助けられた」と感謝する。陶工の黒木昌伸さん(46)は唐臼4基が水に漬かるなどし、きねで1ヵ月間つづき続けた陶土の半分が流失した。被災後、陶器を焼けた

めのまきや土を窯元同士で融通し合い、できる範囲でろくろを回したという。

「自然の川の流れを使って作るのが小鹿田焼。災害は仕方ない」と受け止め、改めて制作活動に励む。

秋の行楽シーズンを迎え、里では観光客が天日干しをしている皿などを写真に収めている。16日に訪れた大阪市の自営業福西淳司さん(60)は「川と唐臼の音が素晴らしい。自然と共存する特有の空気がたまらない」と話した。

小鹿田焼陶芸館(源栄町)によると、9月の入館者数は927人で、例年の7割程度になっている。アクセス道路の復旧が依然として課題で、福岡県側からの市道は通行止めが続いている。幹線の県道は路面がこぼこの区間もある。

秋に開く陶器市「民陶祭」は被災後に中止が決まった。今年12日、恒例の神事のみをして、陶工らが地域の安全を祈願した。

組合の黒木史人事務局長(46)は「直売できる品数がまだ少ない。道路の復旧状況も見ながら、来年の民陶祭が開催できるか協議したい」と述べた。

(刀根徹朗)



〔問①〕 「小鹿田焼」の読みを記事から探そう。

答え【 \_\_\_\_\_ 】

〔問②〕 唐臼とは、こういった仕組みで動くのか調べよう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

〔問③〕 ほかに国指定の重要文化財などに指定されている県内のものを調べ、どこが優れているのか調べてみよう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....